

環太平洋大学体育学部における中・高保健体育科教員養成に向けた「キャリア形成」に関する実践 (1)

— 2019年度前期における実践の現状と課題 —

Practice of “Career Education” for Physical Education Teacher Training Course in International Pacific University

— Current and Status of First Term in 2019 —

体育学部体育学科 田邊 良祐 TANABE, Ryosuke Department of Physical Education Faculty of Physical Education	体育学部体育学科 森 億 MORI, Hakaru Department of Physical Education Faculty of Physical Education
体育学部体育学科 佐藤 正敏 SATO, Masatoshi Department of Physical Education Faculty of Physical Education	体育学部体育学科 赤松 敏之 AKAMATSU, Toshiyuki Department of Physical Education Faculty of Physical Education
体育学部体育学科 平田 佳弘 HIRATA, Yoshihiro Department of Physical Education Faculty of Physical Education	体育学部体育学科 浅野 幹也 ASANO, Mikiya Department of Physical Education Faculty of Physical Education
体育学部体育学科 和所 泰史 WASHO, Yasushi Department of Physical Education Faculty of Physical Education	体育学部体育学科 長谷川晃一 HASEGAWA, Koichi Department of Physical Education Faculty of Physical Education
	体育学部体育学科 小澤 尚子 OZAWA, Shoko Department of Physical Education Faculty of Physical Education

キーワード：教師教育，保健体育科教員養成，キャリア教育，実践的指導力の育成，PDCAサイクル

要約：本報告は，2019年度前期における，環太平洋大学体育学科「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」（本授業）の実践報告である。2019年度より体育学科全体のゼミナールの体制が大きく変更となった。3年次配当の本授業では，特に教職に就くことを希望する学生のキャリア教育を実施している。しか

しながら、これまでキャリア教育として不十分な点が多くあった。そうしたこれまでの課題を踏まえ、2019年度前期では、明確な評価可能な目標を立て、それらを学期末にどれくらい到達できたか評価し、改善していく一連のサイクル（PDCAサイクル）の確立を目指した。評価のためのアンケートでは、約7割の学生が授業に対して満足しているものの、教員適性の把握や、具体的な教員の専門性を獲得できたとは感じていないことが明らかとなった。今後はそうした評価結果を踏まえ、2019年度後期の授業に向けて改善を図る予定である。

1. はじめに

本稿は、環太平洋大学体育学部体育学科（以下、「体育学科」と略記）における、「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」の2019年度前期、特に中・高等学校保健体育を目指す学生を対象とした授業の実践について、現状と課題を報告するものである。具体的に、本稿では今後継続して報告する実践の嚆矢として、①授業の目的と目標、②授業の特徴とカリキュラム、③前期の授業評価¹結果、④評価結果からみた今後の課題と改善点、の4点について報告する。

体育学科では、3年次より「スポーツビジネス」「公務員」「スポーツ科学」「スポーツトレーナー」そして「教員養成」の5つのコースに分かれる²。体育学科の教員養成コースでは、対外的に「優れた実践力を備えた保健体育教員を育成」することを明確的に示している³。

2018年度まで、体育学科の「教員養成コース」の授業では、教員採用試験に向けた勉強をする時間に特化していた。しかしながら、このような学修を教職キャリア形成という視点で見た時、以下のような課題が内在していたと考える。それはすなわち、①キャリア教育の目標として具体的にどのような資質能力を獲得させたいかが明確に示されていなかった、②目標が示されていないが故に、評価し改善するというPDCAサイクルが機能していなかった、③内容が就職支援に偏りすぎていた、の3点である。

ここであえて付言すると、小・中・高等学校におけるキャリア教育では、「キャリア教育の目標を明確に設定した上で、適切な評価を行うことが大切である」とされる⁴。これは、高等教育、大学においても例外ではなく、大学卒業後そのまま職業、体育学科における「ゼミナールⅠ」では教員という職業に接続する段階であるからこそ、PDCAサイクルの確立は非常に重要であると考えられる。環太平洋大学では学外に対して、3年次以降のキャリア教育に力を入れていると謳っているにも関わらず⁵、その教育内容の改善については全く手を付けてこなかったと判断されても仕方ない

状況であったと言えよう。そもそも、「計画（P）」の段階でその目標が「優れた実践力を備えた保健体育教員を育成」という評価可能なものではなく、「評価（C）」がなされていない状況では、「改善（A）」も望むべくもないのである。

以上の課題を踏まえ、2019年度から大幅にカリキュラムを改訂し、本来のコースの目的である「優れた実践力を備えた保健体育教員を養成」するため、キャリア教育に重点を置き授業を展開するとともに、PDCAサイクルの確立を目指すこととした。

2. 「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」の目的と目標

「ゼミナールⅠ」は体育学科3年次の必修科目である。2018年度まで学生は、希望進路のコースを選択し、コースを担当する教員の中から、いわゆる「ゼミ担任」を決定していた。2019年度からはコースの壁を取り除き、ゼミ担任となることが可能なすべての教員から選択、決定できるようになった。そのため、「ゼミナールⅠ」は卒業論文等の執筆に向けた「ゼミナール」と、希望進路のキャリア形成に向けた「ゼミナール」を隔週で実施することとなった⁶。

そのような経緯もあり、2019年度の「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」では、体育学、スポーツ科学の分野で卒業論文を執筆する学生も履修している。そのため、体育・スポーツの学問をベースにした「個性豊かな」教員養成が可能になったと捉えている。

その「ゼミナールⅠ」での目的と目標は以下のとおりである。

「中高保健体育教員に必要な知識、技能、能力、態度を育成する」	
目標1	教職の適性を確認し、他者と協働しながら、学び続ける態度を身に付ける。
目標2	保健体育科の教員として、授業を実施するために最低限必要な教科専門の知識と技能、そして教員の日常の職務を遂行できる最低限の知識と教養を獲得する。
目標3	自らの現状を評価して課題を発見し、その課題解決の方法を自ら探究できるようになる。

授業で使用するテキストは、時事通信出版社の『中高保健体育の完全攻略2020年版』を使用し、後に詳述するが、その他の問題や教材、ポートフォリオは全て担当教員が作成した。以下では、上記の目的と目標を達成するために、2019年度前期の授業でどのような実践を行ったか報告する。

3. 「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」の授業の特徴とカリキュラム

授業は大きく「教師力養成講座」と「実践力養成講座」の二つに大別される。

「教師力養成講座」では、保健体育の10領域（学習指導要領、体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育理論、保健）について学ぶものである。目標2で掲げた「授業を実施するために最低限必要な教科専門の知識」を獲得するため、教員採用試験を意識した50点満点の問題を、それぞれの領域で3種類ずつ作成した。学生は、図1にあるように、90%以上の得点を獲得できれば次の領域に進めるが、満たない場合は同じ領域の他の問題を実施する。同じ領域内で3種類とも不合格となった場合は、再度最初の問題を解くことになる。

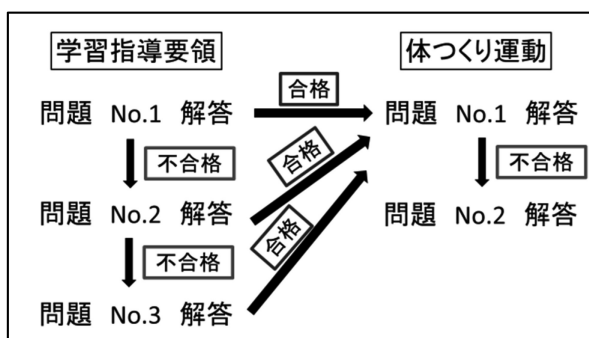


図1 教師力養成講座の実施方法

このような形態をとった意義として、学生は自分自身の進捗で理解を深めていくことができるということが挙げられる。2018年度までは一斉に指定された領域のテストを実施していたが、学習意欲が低下してしまうという課題があった。そこで、進捗に差を設けることで、学生間に競争原理をはたかせるとともに、自らの進捗で学習を進めることができるようにしたのである。

「実践力養成講座」は、実際に実技を行い、指導方法の「コツ」や、当該実技において教員としての課題を発見し、それを克服することで実践力を高めていく

ものである。2019年度より、中・高保健体育の「ゼミナールⅠ」を担当する教員はそれぞれ、ハンドボール、バスケットボール、器械運動、武道、水泳、ダンスと、実際に実技指導を行うことができる専門性を持っている。こうした人的資源を活用しつつ、学生の教員としての実践力を高めていくことが、「実践力養成講座」のねらいである。

この「教師力養成講座」と「実践力養成講座」の二つを中心として、表1のような年間カリキュラムを編成した。なお、前期までに7回目まで終了している。

表1 「ゼミナールⅠ」の年間カリキュラム

回	内容
①	ガイダンス（教採に向けた準備と計画）
②	教師力養成講座①/ 過去問分析と教育観の整理
③	実践力養成講座（バスケットボール）
④	教師力養成講座②
⑤	教師力養成講座③
⑥	教師力養成講座④
⑦	教師力養成講座⑤/ 前期振り返りと評価
⑧	教師力養成講座⑥
⑨	実践力養成講座（器械運動・マット運動）
⑩	実践力養成講座（器械運動・鉄棒）
⑪	教師力養成講座⑦/ 実践力養成講座 武道（柔道・剣道）
⑫	教師力養成講座⑧/ 実践力養成講座ハンドボール
⑬	体育理論解説・演習（オリパラ中心）
⑭	実践力養成講座（ダンス）
⑮	卒業論文発表会 聴講

「ゼミナールⅠ」の授業は、ポートフォリオを作成し、学生一人一人が授業の記録を付けるようにしている。学生は、「教師力養成講座」では、①授業のまとめ、②授業を通して発見した教員としての課題、③②で発見した課題の解決方法、の3点について整理している。また、「実践力養成講座」は上記の3点に加え、「教師の視点から見た指導のポイント」を整理することとしている。このポートフォリオは、ゼミナールⅠ担当教員が手分けをして、毎授業コメントを記入して返却するようにしている。その際、特定の教員がコメントすることが続かないよう配慮している。これにより、学生は課題解決に向け、様々な視点から助言を得ることができ、担当教員は「担当教員全員で教員を育てている」という意識を醸成することを期待している。

なお、2019年度前期は、熱中症等の安全に配慮した結果、バスケットボールのみ1回開催したのみであった。後期の授業では主に「実践力養成講座」を展開し、内容や授業評価等についての詳細を改めて報告す

ることとしたい。

4. 2019年度の授業評価結果

授業評価アンケートは7月16日の3限目（13時5分～14時35分）に実施した。アンケートは個人が特定できないように無記名で行い、また、アンケートに回答するか否かは授業の単位認定に一切関係がないことを明記し、実施した。なお、履修者33名のうち、解答者数は30であった。

以下は、アンケートの具体的な質問項目である。なお、質問項目は、原文ママとしている。

表2 授業評価アンケート質問項目

Q1：あなたは「ゼミナールI」を通して、自らの教員の適性を確認することができましたか？
Q2：あなたは「ゼミナールI」を通して、他の学生と協力したりして、教員として学び続ける態度を身に付けるようとなりましたか？
Q3：あなたは「ゼミナールI」を通して教員として必要最低限必要な教科専門の知識、技能を身に付けようとなりましたか？
Q3-1：Q3の質問で「大変よくできた」「よくできた」と回答した人への質問です。具体的にどのような「知識」「技能」が身に付いたと感じていますか？
Q4：あなたは「ゼミナールI」を通して自らの課題を発見し、その課題を解決する方法を探そうとしましたか？
Q5：前期の「ゼミナールI」の内容は満足しましたか？
Q5-1：Q5の質問で「大変満足した」「満足した」と回答した人への質問です。具体的にどのような点に満足しましたか？
Q5-2：Q5の質問で「満足していない」「全く満足していない」と回答した人への質問です。具体的にどのような点に満足できませんでしたか？

質問項目は、冒頭で述べた通り、PDCAサイクルを導入するため、目標と関連している。およそ目標に対して「あなたは」という主語をつけ、学生の達成度等を図ることができるように設定した。また、Q3及びQ5にて自由記述を設けた以外は、およそ「大変よくできた」「よくできた」「どちらでもない」「できなかった」「全くできなかった」の5件法を採用した。

アンケートの結果は以下ようになった。

表3 授業評価アンケート結果

Q1：あなたは「ゼミナールI」を通して、自らの教員の適性を確認することができましたか？	
・大変よくできた	0
・よくできた	10
・どちらともいえない	17
・できなかった	3
・全くできなかった	0
Q2：あなたは「ゼミナールI」を通して、他の学生と協力したりして、教員として学び続ける態度を身に付けるようとなりましたか？	
・大変よくできた	4
・よくできた	16
・どちらともいえない	9
・できなかった	1
・全くできなかった	0
Q3：あなたは「ゼミナールI」を通して教員として必要最低限必要な教科専門の知識、技能を身に付けようとなりましたか？	
・大変よくできた	2
・よくできた	12
・どちらともいえない	15
・できなかった	1
・全くできなかった	0
Q3-1：Q3の質問で「大変よくできた」「よくできた」と回答した人への質問です。具体的にどのような「知識」「技能」が身に付いたと感じていますか？	
<input type="checkbox"/> テストを通して専門教養の知識	
<input type="checkbox"/> 学習指導要領の内容（9名）	
<input type="checkbox"/> 指導要領の勉強など、勉強の機会ができた	
<input type="checkbox"/> 少しであるが身に付いている	
<input type="checkbox"/> テストに向けてテキストをしっかりと読んだけれど、特別にこの知識・技能が身に付いたとは感じられない	
<input type="checkbox"/> 教員の資質・能力	
<input type="checkbox"/> 毎行われるテストの内容について理解することで、まだごく一部ではあるが採用試験に出るような基本的な知識を身に付けることができた	
<input type="checkbox"/> テキストを読む中で学年による内容の比較など、ある程度理解することができた。	
<input type="checkbox"/> 学ぼうとする姿勢が身に付いた	
Q4：あなたは「ゼミナールI」を通して自らの課題を発見し、その課題を解決する方法を探そうとしましたか？	
・大変よくできた	2
・よくできた	18
・どちらともいえない	6
・できなかった	3
・全くできなかった	1

Q5：前期の「ゼミナールⅠ」の内容は満足しましたか？

- ・大変満足できた 3
- ・満足できた 18
- ・どちらともいえない 9
- ・満足できなかった 0
- ・全く満足できなかった 0

Q5-1：Q5の質問で「大変満足できた」「満足できた」と回答した人への質問です。具体的にどのような点に満足しましたか？

- 勉強する時間をつくることができた
- テストがあるため自ら勉強する機会をつくれた
- 小学校コースとは違ってやらなければならないことが明確にあったから勉強を頑張ろうと思うことができた。
- 反復して学習することにより知識を定着することができる点
- 何度も繰り返しやることによって力をつけていく、基本的だけど土台作りとしてとてもいいと思う
- やる気が出た（3名）
- 毎回の小テストがあるのでクリアしようと積極的に学習するようになった（3名）
- 自分に不足しているものがわかった気がする
- 何度も問題を解くことによって知識はもちろん少しずつ覚えていけるようになった
- 実践的な問題に取り組むことで意欲が出た
- 教員になることの難しさや厳しさを実感し、教員になる意思を夏休み前に固めることができて満足している。
- 自分の勉強に足りないところを実感させられてより勉強しなければならないと思った。
- 1人では絶対にやってなかったことをできた（2名）
- 知識面はもちろん実技面（バスケットボール）でもサポートしていただき苦手を再認識できた

Q5-2：Q5の質問で「満足していない」「全く満足していない」と回答した人への質問です。具体的にどのような点に満足できませんでしたか？

※Q5の結果により回答無し

「教員としての適性」や「教員の専門性」について確認、習得できたかという質問項目において満足度が低い理由として、以下の点が指摘できると考える。まず、適性の確認については、多くの学生が2019年度前期に教育実習に参加したばかりで、適性を判断できる段階にまだないことが考えられる。今回質問項目を設けなかったが、「本授業を通して教職に就きたいという思いが強くなったか」等の教職への志向性について質問する項目を設けるべきだったと考えている。後期のアンケートにおいては、こうした教職への志向性についても確認していきたい。そして、教員の専門性については、学生らに対して、明確な「教員の専門性」を十分示すことができなかったという反省がある。本授業は3年生を対象とした授業であるから、「教職論」等の授業において教員に必要な具体的な専門性について学んできているはずである。そうしたこれまでの授業において獲得してきた知識や理論を、本授業において融合し、教職のキャリア形成に資することができるよう、後期の授業に活かしていきたい。

5. おわりに

2019年度、体育学科は3年次からのゼミナールの方式を変更し、授業を展開するようになった。そうした中で、初めての試みを「ゼミナールⅠ（教員養成コース）」において実施した。特に、キャリア教育を謳っておきながら、その内容については不十分なものであった。そのように同じ状況にあるのは本学だけではないと考える。目的養成大学か否かに関わらず、この事例報告が、各大学において「質の高い教員」を養成するための方途となることを期待している。

2019年4月1日現在、日本では189の大学で中・高保健体育の第一種教員免許状を取得することができる⁷。入学定員を教員免許状取得可能な人数と捉えた時、環太平洋大学は、中・高保健体育教員を輩出する大学としてかなり上位に位置している⁸。つまり、環太平洋大学体育学部体育学科は、非教員養成大学でありながら、国内の中・高等学校保健体育教員の養成において重要な役割を担っており、体育学科で教員養成に携わる者は、そのような使命を直接担っているということである。そのような崇高かつ重要な使命を担っていることを、体育学科で教員養成に関わる教員は自覚しつつ、教員採用試験の合格者数のみで評価できない「質」の高い教員の養成に努めていきたい。

本年度から開始したカリキュラムのため、何かと比較することは難しいが、アンケートの結果から、回答した学生のうち、約7割が「教員として学び続ける態度」を身につけようと試みており、授業に対しても概ね満足だったということがわかる。しかしながら、一方で教員としての適性を発見するまでには至らず、今後の課題であると言えよう。

引用参考文献一覧

- 環太平洋大学『大学案内2020』, 2019年
- 文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』, 2015年
- 文部科学省『中学校・高等学校教員（保健体育・保健）の教員の免許資格を取得することができる大学』, 2019年

-
- ¹ ここでいう「授業評価結果」は大学全体のFD活動の一環としている授業評価ではなく、「ゼミナールⅠ」の目標に対する受講生の「評価」を指す。
 - ² 例えば大学案内や大学ホームページ等で確認することができる。
環太平洋大学『大学案内2020』 p. 85。
 - ³ 同上注, p. 85。
 - ⁴ 今日のキャリア教育の在り方の基本を示した中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年1月）の「第2章キャリア教育の充実方策」においても、各学校におけるPDCAサイクルの確立を明確に要請している。また、ここで引用した「キャリア教育の手引き」においても、その重要性が、言うまでもなく指摘されている。
文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』 p. 107。
 - ⁵ 前掲書2, pp. 25-26。
 - ⁶ 本報告では、希望進路のキャリア形成に向けた「ゼミナール」の教員養成コース、特に中・高保健体育教員を目指す学生を対象とした「ゼミナール」について報告するものである。
 - ⁷ 文部科学省『中学校・高等学校教員（保健体育・保健）の教員の免許資格を取得することができる大学』 pp. 1-5。
 - ⁸ 中学校・高等学校教員（保健体育・保健）の免許状を取得可能な大学の中で、定員が300人を超えている大学は24大学しかない。環太平洋大学はその24大学の一つである。
同上書, pp. 1-5。